

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



No.30

広島のおしゃれ事情

～企画展「江戸のおしゃれ」こぼれ話



「広島城下絵屏風」（広島城蔵）より文化年間の広島的女性。髷（頭部の側面に張り出す結髪）をすっきりつめた髪形。髷（たぼとも。後頭部の張り出し）は後ろに長く張り出している。この頃の着物は帯幅が広いのが特徴。

おしゃれへの情熱

江戸時代を迎え、鎖国政策のもと泰平の世を謳歌^{おうか}する人々の間で、わが国独自のおしゃれ文化が花開きました。武家だけでなく、町人たちがその経済力を背景にファッションリーダーとなったことがこの時代の特徴です。当時の人々のエネルギーは、たびたびお上から出される禁止令や儉約令にも投影されています。おしゃれという自己主張への渴望は簡単に抑えられるものではなかったのです。秋の企画展「江戸のおしゃれ」では、そんな江戸時代のおしゃれ事情を化粧や結髪、装身具から紹介しました。

江戸や大坂の人々だけでなく、当時西国有数の大都市だった広島に暮らす人々もおしゃれにかける思いは熱かったようです。度々発せられた儉約令からその様子をつかってみましょう。

儉約令からみる広島おしゃれ事情

元禄5年（1692）の定に見るように、基本的に広島藩では家中の侍士から町人に至るまで衣服は「木綿」を着用するよう命じられており、江戸時代の基本方針として一貫していま

した。

享保年間には、幕府では徳川吉宗による享保の改革が推進されていましたが、これを受け広島藩でも享保11年（1726）に厳しい儉約

令を触れ出しました。そこでも衣服は「木綿の布を用いること」とされていますが、例外の但し書きが現れます。「大年寄三原屋三郎右衛門および60歳以上10歳以下の者は下着に日野紬つむぎの類を着てもよろしい」、とあるのです。紬まゆは本繭から取れる生糸で織る絹布ほど上等ではないにせよ絹ですから、規制緩和が見て取れます。年寄りや子どもはまあ構わないかというところでしょうか。紬は遠目には木綿にも見えるところから、江戸時代の通人にさりげないおしゃれとして好まれたとも言われます。ちなみに、三原屋三郎右衛門は三原から移住してきた酒造家で、代々城下で大年寄を務めた有力者でした。大年寄と言っても、もちろん60歳以上の年配者という意味ではなく、町組を統括する重職の大年寄として特権を認められたわけです。

おしゃれの小道具①～帯

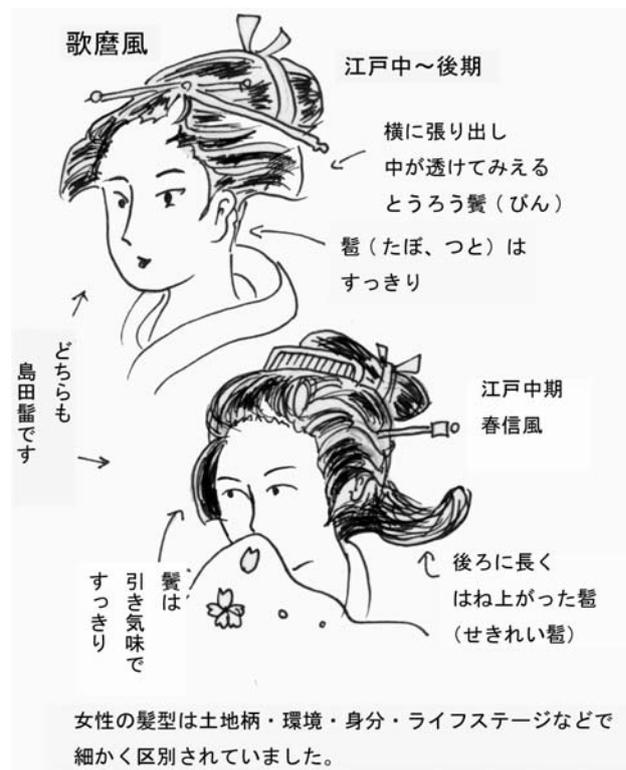
さらに内容を見ますと、「婦人の帯・腰帯は絹を用いてはならない、婦人の櫛・笄こうがい かんざし・簪類べっこうに鼈甲や本蒔絵などを用いてはならない。また鼻紙袋・煙草入れなども粗末なものをもちいること」、などが記されています。

江戸時代の帯は、当初は細い紐状でしたが、寛文期(1661～72)には、紐から平たい帯に変わっていきました。そして、享保期(1716～35)には8～9寸(30～34センチくらい)の幅になり、文化期(1804～17)には1尺5分(40センチくらい)の幅広なものが出現してきます。帯の幅が広がるとともに帯自体の素材やデザインが贅沢なものになっていったことは容易に想像できます。文化年間の城下を描いたとされる「広島城下絵屏風」に登場する女性も、かなり幅広の帯を締めているものが見られ、流行が広島にも到達していた様子がうかがえます。帯も着物と同様木綿が原則でしたが、このころには絹織物の博多帯や紬帯もあったようです。

おしゃれの小道具②～髪飾り

平安時代から戦国時代まで垂髪が主だった女性の髪型は、江戸時代に髷まげを作る結髪が発達すると櫛・笄・簪で頭部を飾るようになっていき、さまざまな材質・デザインの髪飾りが作られるようになります。

中でも鼈甲や本蒔絵あつらは非常に高価なものですから、贅を尽くして誂えたものがお上の反感を買ったのでしょう。しかしいずれも高い加工技術と美しさには目を見張るものがあり、あこがれの対象であったことは頷うなずけますし、そのような奢侈品ぜいたくを町人たちが購入できる財力をつけていたこともわかります。当時の禁制品にはその他象牙、メノウ、珊瑚、ギヤマンなどの櫛・簪もありました。「広島城下絵屏風」に描かれている女性の髪飾りははっきりしませんが、髪型の特徴は見て取れます(巻頭の図版をごらんください)。儉約令を順守していれば、地味な簪一本たけながに丈長(髪を結うとき用いる和紙)を巻くのがせいぜいだったでしょう(他所になります福山藩でそのようにしなさいというお達しがでています)。

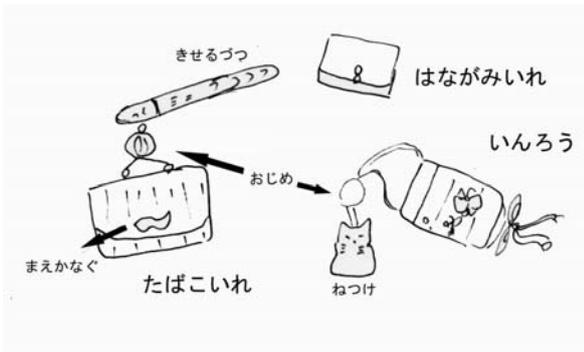




「芸州巖島図会」に描かれた遊女。おそらく鬘甲の櫛は見えるだけでも3枚、簪に至ってはいったい何本あるのか… 美しさのためとはいえ、頭が重かったでしょうね。

城下とは別天地の歓楽街でもあった宮島を描いた『芸州巖島図会』（天保13年・1842年刊）では、広島城下には存在の許されない遊女が横兵庫に結いあげた髪にたくさんの簪や櫛を豪華に挿している様子を見ることができます。

裏をかく？



「袋物」と呼ばれる鼻紙袋・煙草入れについても、小さな持ち物ではありましたが意匠を凝らしたものがたくさん作られていました。ポケットがない和服では、持ち物は袋物・印籠などに入れて持ち歩きました。ことに庶民の男性にとっては煙草入れと煙管筒はほぼ唯一の装身具と言ってよいものでしたので、「渡物」と呼ばれる舶来物の更紗や金唐革を使ったり、豪華な前金具や緒締、帯に装着するための奇抜なデザインの根付を誂えたりしたものです。ところが、儉約令が煙草入れにも言及されるようになると、庶民の側もひと工夫します。一見地味な煙草入れのかぶせをめくると裏地に派手な模様が見えたり、金具の裏座に凝った細工をしたりと「粋」なおしゃれでお上に対抗していきました。鼻紙袋は使うと

きにだけ懐中から取り出し、そのセンスをちらりと見せることができます。あからさまに見せない江戸時代の「粋」はこうしたお上からの締め付けに対抗する形で生まれたともいえます。

このようなおしゃれは広島城下でも見られました。例えば、巻頭の「広島城下絵屏風」にみられる左側の女性、着物はとても地味な色なのですが、ちらっと見える裾裏が派手な赤なのです。寛政元年（1789）の町方へのお触れを見ますと「なんとなく最近町方の妻子の衣類が華美になり、縮緬とか裏に結構なものを付けたり、特に抱え帯（帯の下に結ぶ細い帯。現代では花嫁衣装などで見られます）なんぞは不相応なものを使っている。たとえ裏であっても絹なんか使わずに木綿の布を着なさい。抱え帯も着物に準じて相応なものを用いなさい」とのお叱りの言葉が見られます。寛政年間と言え幕府では老中松平定信による寛政の改革が思い浮かびますが、時の広島藩主浅野重晟も先代の浅野宗恒も、幕府が田沼時代の放漫財政の時代からすでに儉約政策を推し進めていました。



広島城下でのおしゃれショッピング

江戸時代の後半ともなると、衣類やおしゃれ小物も次第に高級化してゆき、お上の方も規制を緩めざるを得ない状態になっていたことが様々な禁制品からわかります。

最後に、どのようなおしゃれのアイテムなどが広島城下で作られ売られていたのか見てみましょう。文政5年(1822)に編集が完成した地誌『知新集』に出てくる文政初年頃の城下の職人たちは、装い関係でも織物、仕立、綿帽子、足袋、元結、平元結、表附下駄・裏附草履仕立、下駄木履、櫛笄師、鼈甲屋、袋物師など多様なものが見られます。欲しい人がいれば作って売るのが現れます。おしゃれの欲求と経済力は城下町の人々のパワーを上げ、蒔絵や^{きりかね}載金入りの印籠を商うなどと言われても、縫箔や鹿の子入りの古着を売るなどと言われて



「芸州巖島図会」に描かれた花見の場での女性。おしゃれしていらっしゃいました。紋付で帆掛船模様の着物をお召しです。帯に着物の^{たもと}袂を挟み込んでいます。その下に、抱え帯かしでき帯がちらっと見えますね。櫛のほか、簪を4本も挿しています。

も、小間物振り売り(紅白粉や元結などを売^{べにおしろい}り歩く商人です)にご禁制品を売らせるなど言っても…装いたいという思いで次なるおしゃれを思案したことでしょう。

(前野やよい)

今話題の資料紹介

「芸州巖島図会」(広島城蔵)



天保13年(1842)刊行の巖島案内記。広島藩士の子で「広島三歌人」の1人とされる岡田清と、狩野派の画家で広島藩絵師の山野峻峰齋が中心となり15年の歳月をかけて完成させました。全10巻からなり、うち1～5巻が巖島の写生図と詩歌、6～10巻は巖島神社宝物の図が描かれています。

写真は六月市立ちの図で、おしゃれな女性がたくさん描かれています。

しろうや
!
広島城

編集・発行

財団法人広島市未来都市創造財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成24年1月26日発行

広島城(天守閣)利用案内

開館時間：9:00～18:00

(12月～2月の平日は9:00～17:00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円(280円)

小人180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月2日

平成24年1月30・31日(臨時休館日)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト

「しろうや!広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます